博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　中井　陽子　　印

学位申請者　彭　津（ほう　しん）

論　文　名　日常会話における談話標識「いや」「いえ」「いいえ」の研究

【審査の結果】

審査委員会は中井陽子を主査とし、本学の伊集院郁子教授（主任指導教員）、大津友美教授、工藤嘉名子教授、嶋原耕一准教授の5名で構成された。最終試験は2026年8月3日（月）に行われ、審査委員会は全員一致で、本論文が博士（学術）の学位を授与するのに相応しいものであるとの結論に達した。

【論文の概要】

本研究は、日本語日常会話における談話標識「いや」「いえ」「いいえ」（以下、「イヤ」系談話標識）を対象に、複数の大規模コーパス（『日本語日常会話コーパス』（CEJC）、『BTSJ1000人日本語自然会話コーパス』（BTSJ）、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』（I-JAS））を活用して日本語母語話者と中国人日本語学習者の使用実態を多角的に分析し、その特徴を明らかにしたものである。コーパス分析では、①社会的要因に着目した使い分け、②談話レベルで見た際の機能分類、③出現位置と機能の対応関係、④母語話者および日本語学習者（習熟度別）の使用実態の4点を焦点に量的・質的に比較し、「イヤ」系談話標識に共通する特徴と相違点を明らかにした。さらに、日本語教科書での「イヤ」系談話標識の扱いを調査したうえで、得られた知見をもとに中国人日本語学習者向けの会話教材の試案を提示し、研究成果の教育への還元を目指した。

本論文は10章から構成される。

第1章では研究背景と問題意識、研究目的、研究課題を示し、本研究の全体構成を述べた。

第2章では、談話標識および「イヤ」系談話標識に関する先行研究を概観し、先行研究の課題を整理したうえで、本研究の位置づけを明らかにした。

第3章では、研究方法と分析対象である『日本語日常会話コーパス』（CEJC）、『BTSJ1000人日本語自然会話コーパス』（BTSJ）、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』（I-JAS）の概要およびそれらを用いる意義や限界について説

明した。

第4章から第7章ではコーパス分析とその結果を示した。まず、第4章では、CEJCを用いて、日本語母語話者による「イヤ」系談話標識の使い分けを話者属性、対人関係、会話形式の観点から分析した。その結果、話者属性に関しては、「いや」は若年層の男性に、「いえ」は中年層の女性に、「いいえ」は中高年層の女性に多く使用される傾向が見られた。対人関係に関しては、「いや」は「仕事・同僚」「友人知人・同級生」など、話し手と会話相手が同等の地位にあり、よく知っている相手に対し多く使用される一方、「いえ」は「サービス・提供者」など、話し手から見て社会的距離があり、よく知らない相手に対し多く使用されていた。会話形式に関しては、「いや」は「雑談」などの私的場面で、「いえ」は「用談・相談」「授業・レッスン」などの公的場面で多く使用されていることを実証した。

第5章では、CEJCとBTSJの2者間雑談データを用いて、「イヤ」系談話標識の機能を相互行為の観点から分析した。その結果、「いや」は【命題への否定表示】【事象への抵抗表示】【談話展開管理】【感情表示】の4つの上位機能を持ち、さらに11の下位機能に分類されることを示した。また、「いえ」は【命題への否定表示】【事象への抵抗表示】【談話展開管理】の3機能を持ち、その下位機能は5種類のみと限定的であること、「いいえ」は【命題への否定表示】の1機能のみで、その下位機能も1種類のみと機能範囲が最も狭いことがわかった。また、多機能性を持つ発話は「いや」が最も多く、「いえ」が比較的少なく、「いいえ」は見られなかった。これらの機能は、「否定対象の範囲」と「否定性の強弱」を軸とする連続体として整理できることを示した。

第6章では、CEJCとBTSJを用いて「イヤ」系談話標識の出現位置と機能との対応関係を分析した。その結果、「いや」はターン頭、ターン内、ターン末、単独産出のあらゆる位置に現れ、位置によって「先行発話への抵抗」、「説明」「語り」「引用」、「情動表出」など異なる機能を果たすことが確認された。一方、「いえ」「いいえ」はターン頭と単独産出でのみ出現し、「先行発話への否定」を担うことが多かった。さらに、会話分析の手法を用いて、「イヤ」系談話標識の出現位置ごとに質的分析を行った。

第7章では、I-JASの対話タスクを用い、日本語母語話者と習熟度別の中国人日本語学習者の使用頻度、機能の特徴、出現位置と機能の対応関係について分析した。その結果、①母語話者は「いや」を多用する一方、学習者は「いえ」「いいえ」を多く用いること、②母語話者も学習者も同様に、「いや」については【事象への抵抗表示】、「いえ」「いいえ」については【命題への否定表示】の使用が最も多いこと、③母語話者による「いや」は【感情表示】の使用が多い一方、

学習者にはそのような使用傾向は見られないことがわかった。また、学習者は言い直す際に「イヤ」系談話標識を 1 つの言語的方略として利用し、自らの発話を効果的に差し控えつつ、より適切な発話を産出しようとする様子が観察された。さらに、「いや」は中級前半で最も多く使用され、それ以降は使用が顕著に減少し、かわりに「いえ」「いいえ」が増加するなど、習熟度による違いも確認された。

第 8 章では、日本と中国で使用されている日本語教科書計 67 冊を調査した。その結果、日本の総合教科書では、初級で「いいえ」の提示が中心であり、中上級になると「いや」の提示が中心となるが、例文には現れるものの、体系的な指導項目として取り上げられていないこと、中国で出版された会話教科書では「いや」「いえ」の提示はごく少なく、「いいえ」が中心的に扱われていることなどがわかった。7 章の分析で、学習者による「いいえ」の使用数が多かったのは、いずれの教科書においても「いいえ」が多く提示されている現状が影響している可能性があることなどを指摘した。

第 9 章では、第 4 章から第 8 章までの分析結果を総合的に考察し、「日本語教育の参照枠」に対応した A1・A2 向けの基礎編と B1・B2 向けの応用編からなる、中国人日本語学習者向けの会話教材の試案を提示した。

第 10 章では、研究課題への回答、本研究の意義、今後の課題を示した。今後の課題として、コーパス研究の限界への対応やマルチモーダル分析、中国語における談話標識との比較、学習環境の違いによる影響の検討を挙げた。

【講評】

本論文は、研究課題に即して段階的に 3 つの大規模コーパスの分析を積み重ねることで、多角的に「いや」「いえ」「いいえ」の特徴を描き出すことに成功しているとして、高く評価された。また、統計手法を用いて量的な出現傾向の差異を明らかにする一方で、会話分析の手法を用いてイヤ系談話標識の振る舞いを詳述し、量的・質的にバランスの取れた分析に成功している点も特筆に値する。そのほかにも、以下のような指摘があった。

- 量的分析と質的分析の手法がうまく組み合わされていて、全体的な傾向を把握するための分析と会話の連鎖構造等を細かく記述する分析とがうまく組み合わされている。
- 先行研究での作例による指摘や辞書の記述内容について、詳細かつ丁寧な分析により実証的に示すことができており、談話標識の研究としてもコーパス研究としても意義がある。
- 全体として構成がわかりやすく、読みやすく記述されている。研究課題と分析結果の対応関係が理解しやすく配置されている。

- データ分析が主眼となる論文では、教育への示唆が後付けに留まる場合が多いが、本論文では教科書の調査と教材の提案まで完成させている点が優れている。

一方で、課題として以下のような指摘があった。

- 機能のコーディングの際の具体的方法やコーパスの音声・動画の利用方法、機能分類の際の主機能と副機能の認定方法について、説明がやや不足している。
- 機能の認定方法について、さらに多様な例を示して議論してもよかったのではないか。多機能性についても、パターンの集計にとどまらず、さらに質的分析を深めることが可能だろう。
- 表について、対象人数の総数を追記したり対象データの範囲について注で明記したりすると読み取りやすくなるものがある。図についても、折れ線グラフと棒グラフのいずれがより適切か検討したほうがよいものが含まれており、改善の余地がある。
- 教科書の分析の際に、総合教材と会話教材を扱っているが、2010 年以降のものに限定する必要があるのか、聴解教材は扱わないのか、といったことも検討する余地がある。
- 提案された教材の中には、学習者の理解が容易でない例も含まれているように見受けられるため、実用化する前に再度検討する必要がある。アウトプットに着目するだけでなく、インプット教材も検討すると、より効果的なのではないか。
- 論文中で今後の課題としても指摘されているが、イヤ系談話標識の効果的な例と支障が生じる例についても、マルチモーダルに分析してほしい。また、「でも」や「だから」との共起関係の分析のほか、雑談場面に限らず話し合い場面におけるイヤ系談話標識の分析とそれをもとにした教材の提案など、さらに分析や教育の視点の可能性を広げてほしい。

審査委員からのコメントはいずれも、今後の研究の発展の可能性の指摘や研究成果を日本語教育に応用するための提言と解釈されるものであった。また、これらの指摘や助言に対して、彭氏は的確かつ誠実に応答し、本研究の改善すべき点について十分に自覚していることが認識できた。

【総合評価】

学位申請論文の内容、最終試験での応答から、審査委員は全員一致で、本論文が博士（学術）の学位を授与するのに相応しいものであるとの結論に達した。